

《正岡子規 (36) の続き》 その292

天涯茫茫生

子規と鷗外の初対面はいつかは分らぬが、日清戦争で金州滞陣中、第二軍兵站軍医部長の鷗外を、新聞「日本」から派遣の従軍記者子規は何回か訪れて俳論を重ねている。

また戦後の子規庵の句会にも鷗外は出席し (M29・1・3)、折柄、中根鏡子との見合のため松山から上京中の漱石を交え、鳴雪、飄亭、虚子、河東 銓、その弟の碧梧桐と句作をしている。

子規と鷗外との文通は、講談社版の「子規全集」によると、明治29年2月1日から同34年1月1日まで全15通が載っている。2月1日の分には「腰骨が痛み出して今日杯は一步も動けぬ」と報じている。半ばは俳句稿であり、半ばは、文法の係り結び、字句の解釈についての質疑であるが、珍らしいのは鷗外が草花の種 (三種) を贈ったことに対し、その発育の状を知らせる書簡である (M30・11・7)。

鷗外は5人の子どもに何れも西欧風の名をつけた。即ち於菟 (虎の意。OTTO)、茉莉 (不律 (筆の意?)、FRITZ 生後半歳で歿)、杏奴 (類である。外国に行ったとき、名前がすぐ覚えられるようにとの配慮である。事実、

4人共、ドイツ、フランスなどの外国暮らしをしている。

そして4人はそれぞれ父鷗外の思い出を書いて世にあらわした。その発行の順に書名を書けば、小堀杏奴の「晩年の父」(昭和11年)、森於菟の「父親としての森鷗外」(昭和30年)、森類の「鷗外の子供たち」(昭和31年)、森茉莉「父の帽子」(昭和32年)である。いずれも父の詩魂と文才を受け継いでいるのであろう。

列伝⑨

内藤鳴雪 (本名素行) モトユキ  
享年80歳

生年 一八四七 (弘化四・四・一五)  
歿年 一九二六 (大正一五・二・二〇)  
死因 脳出血

俳人。明治22年、43歳のとき旧藩主久松伯爵家が旧藩子弟のために建てた常盤会寄宿舎の監督となり、舎生の正岡子規に俳句を学び、急速な進歩を遂げ、一流俳人となる。尤も、郷里松山に住していた頃、子規の外祖父の漢学者大原観山に漢詩を学んでいた。明治23年、鳴雪に左の句がある。

詩は祖父に俳句は孫に春の風

二代にわたって師事する不思議な縁の句である。

氏は松山藩士 (江戸定府) の子として、松山藩邸に生れた。父の勧めにより、藩地松山、京都、東京と地を転じながら、漢学、漢詩を学び、かたわら多くの雑書をも好んで読んだ。

廃藩置県の後、8年愛媛県権参事としてもつぱら教育行政にあたる。13年文部省参事官に抜擢され、文部大臣森有礼の知遇を得て活躍、大臣暗殺されるに及び辞任した。

次いで旧藩主久松伯爵家の依頼で常盤会の監督となつたが舎生の正岡子規の指導により俳句を学び、その仲間となつて、一歳を出でずして一家の風格をなした。子規とは21歳の違いがあり、子規は常に鳴雪翁、鳴雪先生と呼び、書いた。

鳴雪の号は、世の中は成り行きにまかすの意で、本名素行に基ずくのではない。子規を交えた「蕪村句集輪講」は子規の死去の一週間前まで54回続き、鳴雪を開眼せしめた。

和漢学の造詣の深いため子規門の長老と仰がれ、43年監督を辞してからは、専ら俳道に従い、後進の指導に当つた。

『鳴雪自叙伝』(岩波文庫)があり、生い立ちより76歳までの事歴、政治、世相、藩の事情などの詳しい記録がある。驚くべき記憶力である。

口述筆記だが、平常でも口を開けば数時間のべつ幕なしに喋り続けた。相手が年少者であろうとおかまいなしであった。